

時間の概念が社会生活を変える！？

現状を改善して少々効率を良くしても社会は殆ど変化しませんが、産業革命のように従来とは全く違う仕組みの改革で効率が5倍、10倍にアップすると働き方が変わるなど目に見えて社会が変化します。産業革命以降これまでは何かにつけてどれだけ速く多くのことが出来るのかが問われてきました。

江戸時代は江戸から京都までの東海道53次(492km)を約2週間かけて歩いていましたが、明治に入り1889年に鉄道が開通すると約18時間で移動できるようになりました。鉄道の登場は移動時間の劇的短縮と定時運行という時間概念を国民に定着させ、日本の近代化と都市の誕生に寄与しました。その後は改良を続け1958年に電車特急「こだま」が東京、大阪間を6時間50分でつなぎ「定刻」が当たり前前の社会をつくりました。

次の大きな改革は1965年にジェット旅客機が就航し東京と大阪の都心間が日帰り可能な約3時間で結ばれた時です。同年、新幹線も3時間10分運転を開始しました。国内諸都市も東京との日帰りが可能になり、大阪本社の企業が東京に移転するなど国の形が変化し始めます。海外へも1日あれば移動可能になり、経済活動がグローバル化し途上国の工業化のスピードが増しました。

その後50年以上経過しましたがジェット機に代わる革新的な交通手段は生まれそうにありません。しかし、今回のコロナウィルス騒ぎで非接触という新しい日常を体験して、分野によってはビデオ会議システムなどの通信手段が移動時間ゼロの革新的な交通手段になりうることを実感しました。リモートワークやオンライン帰省はその好例です。8Kや5Gなどの情報通信技術を活用すれば瞬時に送れる情報量も多くこれまでとは違う臨場感もあります。

今後は拘束時間という価値基準から実績で評価される厳しい時代を迎えるでしょうが、見方を変えれば移動時間ゼロで増えた時間を使って東海道53次を歩いて楽しむこともできる時代の到来とも言えます。

非接触型社会という地方の希望

新型コロナウイルスの出現による外出制限や移動抑制はこれまでほとんど議論されなかった現象を顕在化させました。例えばグローバル化の波に乗って成長してきた航空業界や観光業界は採用活動を中断していますし、日本をけん引してきた自動車産業をはじめとした製造業は外国で生産している部材を調達できず生産を止める事態にもなりました。いずれも突然の需要減に見舞われて今季の売り上げ見通しすら発表できなくなっています。

個人レベルでもマスクや消毒液が店頭から消えたりパソコンが手に入らなかったりという経験をして国際分業の負の側面を知りました。

見方を変えると、これらの事象は非常時にも困らない態勢づくりを考えるチャンスを与えてくれるとともに、非接触型社会の新たな需要を顕在化させたとも言えます。オンライン授業やテレワークへの取り組みを通じて場所に制約されないIT機器の便利さを実感した人が増える一方、画面のフリーズやオンライン申請でのトラブルの体験で情報インフラの貧弱さやIT活用能力の不足も明らかになりました。

また、派遣の仕事やアルバイトが無くなり1日1食で過ごしている人がいる反面、首都圏近郊の農家では当てにしていた技能実習生が入国できずほうれん草やイチゴの収穫をあきらめたという報道がありました。都会と地方のマッチングさえうまくできれば解決できる課題が多々ある実態を教えてくださいました。

どこでも仕事が可能な職種の人には自然豊かで住環境が良く生活費が安い地方への移住を始めるでしょう。職住近接が当たり前の地方都市は時間を有効に使い新しい生活様式の中でも多様なライフスタイルを実現できる環境があります。都会からの移住やマルチハビテーション(多拠点居住)の実現は、企業のコストを下げ、従業員の満足度も上がります。マッチングで人口が増えた地方には時間差でエッセンシャルワーカーも移動し国内の交通需要を支えるはずで。